

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：34425

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03067

研究課題名(和文) 英国のパブリック・フットパスをめぐる文化・社会的環境の構築に関する人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study on the Composition of the Cultural and Social Milieu Emanating from the Network of Public Footpaths in Britain.

研究代表者

塩路 有子 (SHIOJI, YUKO)

阪南大学・国際観光学部・教授

研究者番号：70351674

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は3つある。(1) フットパスによる地域振興を推進する住民(Walkers are Welcomeの各地グループ)、フットパスの維持管理団体、ウォーカーとウォーキング・グループ、フットパスの土地所有者(国立公園を含む)、行政(州、府、町村レベル)の活動と関係性を具体的に明らかにした。(2) Walkers are Welcome(WaW)活動を行う人々とそれに関わる人々のフットパスに対する共通点や姿勢を明らかにした。(3) フットパスをめぐる文化・社会的環境がどのように(1)や(2)から構築されるのか、その過程と要素を明らかにし、英国における「パブリック」概念について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、英国のフットパスをめぐる文化・社会的環境の構築過程を詳細に明らかにしたことで、従来人類学におけるヨーロッパ研究に新たな知見を提供する点である。また、近年、人類学が対象としている「公共」や「公共性」というテーマに対して、英国のフットパスを通して醸成される「パブリック」概念を具体的に解明したことで、新しい視点を人類学に提示できる点である。社会的意義としては、フットパスを活用した地域振興が実現している英国の事例から、日本や世界において活発化している自然環境を活かした地域振興という課題に「フットパス」という観点から提言することができる点である。

研究成果の概要(英文)： Three main points emerged from this study. (1) The study clarified the activities and relationships of the following; Walkers are Welcome (WaW) groups, associations involved in the maintaining of footpaths, walkers and walking groups, landowners (including the National Parks), and local administrations (at county, district, town and village level). (2) The study also drew attention to common elements and attitudes towards footpaths among people committed to and involved in WaW activities. (3) Finally, it revealed the processes and composition of cultural and social milieus emanating from the system of footpaths and discussed the concept of “publicness” in Britain.

研究分野：文化人類学、観光人類学

キーワード：英国 フットパス 歩く観光 地域振興 Walkers are Welcome 活動 パブリック概念 コッツウォルズ地域 国立公園

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者が本研究を着想したきっかけは、2013年5月の筑波大学国際シンポジウム「英国のフットパスおよびWaWタウンと日本におけるその展開の可能性」と自身の講演「フットパスの利用と維持管理について-英国コッツウォルズ地域北部の町の事例」である。同シンポジウムを通して、英国のフットパスをめぐる自然環境の保全と、フットパスによる地域の活性化を推進するWaW (Walkers are Welcome) 協会 (2007年発足) の活動が、文化遺産の保全と活用に関する研究代表者のこれまでの研究と類似点があり、日本や世界において活発化しているフットパスの展開に多くの示唆を与えうると認識したからである。

(2) 19世紀末以降、英国では自然環境が保護され、人々は日常的に自然と触れ合い、その環境を維持、管理してきた。それを可能にしているのが、英国内に網目状に広がる「フットパス」である。英国人が数世紀にわたって発展させてきたフットパスは、それ自体が人と自然を結ぶ文化遺産である。そこで本研究は、フットパスに関わる人々や集団を詳細に分析することで、彼らの関係性が生み出す文化・社会的環境の構築過程を明らかにし、文化遺産としてのフットパスの意味を考察することを意図した。こうした研究は国内外を通じてほとんど見あたらない。例えば、近年の英国に関する人類学的研究では、レポート(British Subjects, 2002, Routledge)の編著書をはじめとして、英国内における多様な民族性や社会環境が多く取り上げられる傾向にあるが、英国人が長い歴史の中で形成したフットパスに関する人類学的研究はほとんどない。一方で、英国のフットパスに関する研究では、オープン・スペースやコモンズを含めた成立過程や法的規制に関する地理学的研究や歴史学的研究が多い(W.G.Hoskins, The Making of the English Landscape, 1977, Penguin Books etc.)。

(3) また、近年、日本の社会学や人類学では、「公共」や「公共性」をテーマにした研究が多くみられ(斎藤純一『公共性』2000年 岩波書店; 山下晋司編『公共人類学』2014年 東京大学出版会など)、概念の理論的分析や災害、医療、人権などの現代的な問題を取り上げている。しかし、フットパスを「歩く」という自然で日常的な行為について、その概念が現在、具体的にどのような構築され続けているかを分析する研究は少ない。本研究は英国の「パブリック」概念についてフットパスを通して具体的に解明し、公共性に関する研究に新しい視点から貢献したいと考えた。

2. 研究の目的

英国におけるパブリック・フットパス (Public Footpath、以下フットパス) は、18世紀の囲い込み以前から存在し、「歩く権利」(Right of Way) が法的に認められている公共の自然道である。現在、フットパスをめぐるのは、歩く人々だけでなく、それを維持管理する住民や民間団体、フットパスによって地域の活性化を推進しようとする住民や行政など、自然環境の維持管理に加えて、人的ネットワークを含む文化・社会的環境が構築されている。本研究は、フットパスをめぐる同環境の構築過程とその要素を文化人類学的にミクロ・レベルで明らかにすることによって、英国社会における「パブリック」概念が示す内容を具体的に解明し、現代における人と自然を結ぶ文化的な遺産のもつ動態的な意味を考えることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、まず、2007年に発足した全国組織であるWaW協会に登録し地域振興に成功している町(WaWタウン)であるコッツウォルズ地域のある町ウィンチコムに焦点をあて現地調査を実施した。同町は、国指定のフットパスだけでなく、州や町が指定するフットパスを多く保有する。英国のフットパスに関する歴史的背景と現在の法的規制については文献調査を進めた。

(2) ウィンチコムとコッツウォルズ地域における調査は、現地の研究協力者と連絡を取り合い、フットパスをめぐる人々や団体に対する聞き取り調査を行い、それらの団体などの活動には参加観察を実施した。主に次の6点について明らかにした。

- ① 同町とその周辺のフットパスの種類や距離、広がり。それらの成立経緯や背景。
- ② フットパスを含む土地所有者のフットパスへの関わり方。
- ③ フットパスを維持管理する住民、同地域の環境保護団体の構成員とその活動。また、彼ら同士の関係性。
- ④ フットパスを歩く人々、ウォーキング・グループや全国レベルの散策団体であるランブラーズ協会などのフットパスへの関わり方。
- ⑤ フットパスによって地域の活性化を推進している同町のWaWグループの活動。また、メンバー同士の関係性。彼らの活動に対する行政の対応。
- ⑥ フットパス周辺の自然環境の維持管理、活用に関わる①から⑤の人々や団体相互の関係性とネットワークについて。

(3) さらに、全国で現在約100の町村に登録しているWaWタウンのうち、成功を治めた他地域の町村を選択し、各地域での会合や町レベルの集まりに参加して調査した。その上で、ウィンチコムと比較し、地域による共通点や差異点などを分析した。

(4) 以上によって、英国社会における「パブリック」概念が示す内容を具体的に解明し、現代における人と自然を結ぶ文化遺産であるフットパスの動態的な意味を考察した。

(5) これらの調査結果を整理・分析し、日本文化人類学会、北海道大学観光学高等研究センター、日本フットパス協会全国大会などで口頭発表し意見交換した。その都度、とりまとめた研究

成果は論文や報告文として学術雑誌等において公開した。一部の成果は英書籍に分担執筆した。また、現在、研究成果を取りまとめ一般向け書籍として執筆推敲中である。さらに、日本におけるフットパスによるまちづくりグループの報告会などで発表し、実践的な提言を行っていく。

4. 研究成果

研究の主な成果

(1) 英国の Walkers are Welcome 活動

Walkers are Welcome UK Network には、2019年7月現在、105の市町村が登録している。WaW 組織は、北部イングランドの町ヘブデン・ブリッジで一住民が「フェアトレード・タウン」から WaW 概念を着想したことに始まる。既存の主要な観光市場に頼るのではなく、ウォーキングやウォーカーという目立たない少数派に注目することで地域振興に導こうとする活動である。2006年に提案、2007年2月に WaW 協会を結成した。草の根の組織体を志向しているが、現在では英国各地で一種の社会改革的活動になっている（塩路 2016, 2018, 2020）。

WaW 協会には6つの目的があり、同協会のウェブサイトには WaW ネットワークの利点が掲載されている。WaW タウン登録には6つの条件を満たす必要がある。10周年を記念して WaW National Survey 2017 が実施され、その活動の成果が明らかになった。

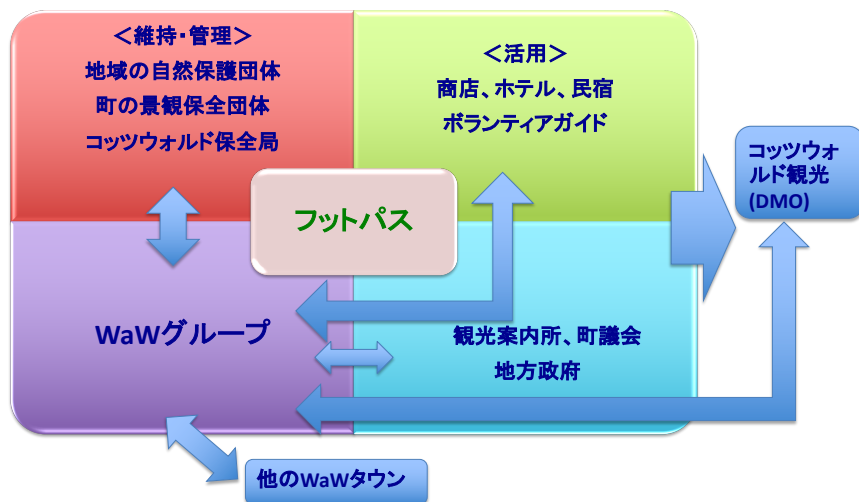
(2) フットパスの活用と地域活性化

① コッツウォルズ地域ウィンチコム事例

ウィンチコムでは、2000年～2009年、町の商店やパブが次々と閉店した。2009年、一住民が町議会で WaW タウン概念を提案し、全議員が賛成、協力を申し出、準備金を支給し、ワーキング・グループが結成された。同グループは、既存のフットパスを活用した周遊型のウォーキング・ルートであるウィンチコム・ウェイを考案し、ウォーキング・マップを作成、Web 等で広報したことで、町を訪れるウォーカーが徐々に増加し、パブ、商店、ホテルが活気を取り戻した。今では町の観光案内所 (TIC)、ボランティアガイドや景観保全団体も WaW 活動に賛成し、フットパスによるまちづくりに協働している。その結果、他の住民もウォーキングに関心をもち、歩くことで町の自然環境を認識するようになった。

ウィンチコム WaW グループの活動メンバーは、当初12人で現在は9人である。元ナチュラル・イングランド勤務（発起人）とウォーキング・ツアー会社勤務（夫）、町議会議員4名、宿泊施設経営者、商店主、行政勤務、自然保護団体メンバー、元銀行支店長などである。彼らは、ウォーキング、自然保護（維持管理）活動を日常的に行い、地域活性化に積極的に取り組む姿勢をもつ。活動内容は、フットパスの見回り（地域の自然保護団体や町の景観保全団体と協力）、TIC やボランティアガイドと連携、町の商店に WaW 活動への協力呼びかけ（WaW HERE ステッカーを貼付）、週に1、2回ウォークの実施、毎年ウォーキング・フェスティバルの開催、地域観光・地方紙・Web に広報（Web にマップ掲載）、ウォーキング・グループや他の WaW タウンへの情報提供である。彼らの活動は、コミュニティ内につながりを生み、既存のボランティア・グループとうまく連携し、自律的に地域を活性化していることが明らかになった（下図参照）（塩路 2016）。

ウィンチコムにおけるフットパスをめぐる関係



② コミュニティ外部とのつながり

ウィンチコムが位置するコッツウォルズ地域は、国指定の自然景勝特別保護地域 (Area of Outstanding Natural Beauty、略称 AONB) であるため、上の図のように、WaW 活動グループはその全域の保全管理を統括する公的組織であるコッツウォルド保全局 (Cotswold Conservation

Board) との連絡も行う。他地域では、それが国立公園 (National Park) であり、ナショナル・トレイルの維持管理を行う地元の組織である(塩路 2020)。WaW グループは、それらの開催するミーティングに定期的に参加し、それらの組織のメンバーに直接連絡をとって対応を検討することもある。

さらに、コッツウォルズ地域の DMO (Destination Management Organization) と定期的なミーティングを行い、必要な情報を広報してもらおう (図参照)。そのさいに地域の上部行政であるコッツウォルド行政府、その上のグロスターシャー州政府の関係部署に対応について連絡することもある (図参照)。コミュニティ内で生まれたつながりと情報を最大限活用して、コミュニティ外のより広域な組織や行政とうまく連携する形が作られている。

また、WaW タウンに登録すると、周辺の WaW タウンと連携することが多くなる (図参照)。徐々に WaW タウン同士のネットワークが構築される。最初は、互いの町を訪問し合い、フットパスを一緒に歩いて情報交換したり、その町で開催されるウォーキング・フェスティバルに出かけてウォークに参加したりする。ウォーキング・フェスティバルは、春から秋にかけて年に 1 回多くの WaW タウンで行われる「歩く祭典」だが、その地域の多様なフットパス・ルートや独自のイベントを体験でき、一般のウォーカーだけでなく、各地の WaW 活動メンバーも参加する。他地域の WaW タウンのメンバーと交流することで、地域による取り組みの違いや行政の対応、助成金の応募や募金活動による資金づくり、ウォーキング・フェスティバルの催しのアイデアなど、さまざまな要素について意見交換できる。

周辺の町村をつなぐフットパスは既存の場合が多いので、WaW タウン登録後も連携してフットパスを整備したり、ウォーカー誘致に取り組んだりすることが多い。そうして周辺の WaW タウンとのつながりが強固になると、それらをつなぐ新たなフットパス・ルートが形成されることもある (塩路 2018: 148-149)。

③ 多様な WaW タウン、その特徴と違い

研究代表者は 2013 年～2019 年に計 28 カ所の英国各地の WaW タウンを訪れ調査した。イングランドでは、歩くことに関心のある活動的な人々によって運営されており、イングランド北部は、他の地域と比べ、より自立的な活動姿勢をもち、コミュニティを自分たちで改革しようとする意識が強い。イングランドでは、農家は農地を荒らし家畜に被害を与える可能性のあるフットパスやその活用にはあまり積極的ではなく、反感をもつ場合も多い。ウェールズはイングランドとほぼ同じである。一方で、スコットランドは、農家も活動メンバーに入っている場合があり、より柔軟な活動が見られた。

④ WaW タウンの活動スタイルと課題

WaW タウンは、どこも住民が主体となって活動している点は共通する。しかしその経緯には 3 パターンあり、行政から依頼されて住民主導になったケース、住民が結成して行政を動かすケース、最初から行政と協働するケースがある。活動メンバーの構成としては、退職した高齢者が多い。1930 年代にウォーキングや歩く権利獲得で主流だった労働者ではなく、現在は知識階級が入る保守的な層(技術者、教師、公務員など)が多い。その技術や能力、知識を活かして、各地で WaW タウン活動を展開、発展させている。

今後の課題は、「若者をどのように取り込むか」である。活動メンバーには若い世代は少数であり、ウォークへの参加も子供ウォークや家族ウォークなどでも若者の参加は少数である。

(3) フットパスと「パブリック」概念

英国における WaW 活動は、住民が主体的に声をあげ、働きかけ、活動しているもので、ボランティアがその大半をしめる。その背景には、政府と行政の資金不足があることは否めないが、そこに本来の民主主義的な地域コミュニティのあり方を見ることができた。それは、自らが暮らす地域をより良くしようとする地域への奉仕的、貢献的活動であり、強い自治意識である。

WaW 活動は、フットパスを「歩くこと」で人と人の関わりを創り出し、歩く人のために歩く環境を整えることで自らが住んでいる環境を守り、見直すことができる。それは、失われていたコミュニティ感覚や希薄になっていた他者とのつながりを取り戻して「コミュニティ」を再構築し、盛り上げることに繋がっている。

「歩くこと」で見えること、創ることができる関係があることが明らかになった。町でこれまで関わることのなかった商店や宿泊施設、地主や農家、行政議員や他の活動団体、さらに広域の組織や団体と「つながる」関係が生まれた。そして、観光産業が「歩く観光」を支える仕組みは、産業がコミュニティと関わり、かつコミュニティが外の人々とつながることで活性化する可能性も秘めている (塩路 2018: 149-155)。コミュニティの活性化は経済効果だけではない。個人やグループを生き生きとさせ、「つながり」を再び創り出すことでもある。そうして、個人からグループ、グループからコミュニティへと、小さな社会で実現する活性化である。WaW 活動の全国的な展開は、そうした草の根的なコミュニティの活性化を人々が求めた結果である。

このような英国の WaW 活動とコミュニティづくりは、世界的にも新しい動きである。それは、「歩くこと」を通して現代社会のなかで失われてきた「つながり」の重要性を再認識し、同時に、

現代的で多様な新しい「つながり」がコミュニティという小さな社会を変革する可能性があることを示している。

WaW活動に取り組む人々とその地域には、その多様なつながりを通して共有される「パブリックネス」(publicness)が醸成されていると考える。それは、高速化や効率化が進む現代社会のなかで個々に生きる私たちが失くしてしまったものかもしれない。この「パブリックネス」は、先に述べたコミュニティに対する奉仕精神に根ざし、「フットパス」という身近な文化遺産を現代的で多様な新しいつながりによって守り、活用することで醸成されている。WaW活動によって、「フットパス」をめぐる現代的な「パブリックネス」がうまく醸成されたことで、人々の「生活の質」が取り戻され、よりよいコミュニティを再構築することができたのではないかと考えている。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

以上の本研究成果は、日本国内においても世界的にも未研究分野で新しい知見である。その意味で学術的に独創的であり、国内外で実践的に応用できるという社会的意義もある。そのため、国内・国際学会のみならず、地域振興に関わる社会活動においてインパクトがあると考えられる。

今後の展望

国内外で本研究成果を発表、出版していく予定である。また、本研究は、2019年度まで1年間、研究期間を延期したことで、英国における祭りとフットパスの関係、国立公園とフットパスの関係について詳細に調査できた。後者はすでに論考として出版したが、前者については今後とりまとめて公表していく予定である。

研究期間中には、スコットランドのフットパスの特徴であるオープン・アクセスが権利として確立している北欧での調査と文献調査を開始した。延長期間には、フィンランドの国立公園を視察、体験することができ、それらの調査と本研究成果を踏まえて、アクセス権も含めた「ヨーロッパにおけるフットパスに関する研究」の展望がひらけた。さらに、世界に視野を広げた「フットパスと人間が歩くこと」という人類学的研究テーマを着想した。今後は、国際学会などにおいて研究成果を発表し、将来の個人研究や共同研究の実現に近づけていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 塩路有子	4. 巻 第55巻第2号
2. 論文標題 英国におけるパブリック・フットパスと地域振興（part3）－国立公園や自然景勝特別保護地域とWalkers are Welcome活動－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 阪南論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 69-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩路有子	4. 巻 第54巻第1号
2. 論文標題 「英国におけるパブリック・フットパスと地域振興（part2） 小さな町村のWalkers are Welcome活動とウォーカーと関わる観光産業」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 阪南論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 145-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩路有子	4. 巻 51
2. 論文標題 英国におけるパブリック・フットパスと地域振興－Walkers are Welcome タウンの活動－	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 阪南論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 213-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 塩路有子	4. 巻 No.96
2. 論文標題 英国のフットパスとWalkers are Welcome タウン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 まほら	6. 最初と最後の頁 46-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 塩路有子
2. 発表標題 「英国のフットパスとまちづくりー『歩く人を歓迎する』活動」
3. 学会等名 大阪府公開講座フェスタ（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩路有子
2. 発表標題 「フットパスと地域活性化ー英国 Walkers are Welcome タウンの活動ー」
3. 学会等名 全国フットパスの集い in 柴田フットパスフォーラム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩路有子
2. 発表標題 英国のパブリック・フットパスと地域活性化活動：文化遺産をめぐる文化・社会的環境の構築
3. 学会等名 日本文化人類学会 第51回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 塩路有子
2. 発表標題 英国のフットパスと地域活性化：Walkers are Welcomeタウンの活動
3. 学会等名 北海道大学観光学高等研究センター第6回観光創造研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩路 有子
2. 発表標題 「英国におけるフットパスとWalkers are Welcomeタウンの活動」
3. 学会等名 Anthropology of Japan in Japan (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 塩路 有子
2. 発表標題 「英国におけるフットパスの再発見と地域活性化」
3. 学会等名 はびきの市民大学 (招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Nicola Frost and Tom Selwyn (eds.), Yuko Shioji	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Berghahn	5. 総ページ数 182
3. 書名 Traveling towards Home	

1. 著者名 飯田卓 (編)、塩路有子、小谷竜介、関 雄二、中村 亮、門田岳久、河合洋尚、吉田憲司、齋藤玲子、吉田ゆか子、野林厚志、竹中宏子、橋本裕之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 366
3. 書名 『文明史のなかの文化遺産』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----